



川に見る・日本の四季⑥ 木曾川水系の「夏」を追う

中天の陽の下を^{はし}奔る、白い溪流。

真夏の太陽の下、飛騨川沿いに国道41号を高山方面に向かって走り、小坂町で飛騨川と別れて支流の小坂川に入った。御岳(標高3,067m)山麓を源流とする清流だ。

小坂川を上流に向かう。途中にカヌー公園があった。変化に富んだ溪流が練習に適しているようだ。毎年、競技会も開かれているという。この川はまた、鮎や岩魚、アマゴなど川魚の宝庫で、釣り人にはこたえられない釣り場になっている。

カヌー公園の近くにある湯屋温泉という湯治場(川沿いの御岳山麓には濁河温泉という湯治場もある)付近で川岸に下りた。白い飛沫を上げて流れる溪流が気になったのだ。真夏の太陽に映えて奔り下る、白い溪流の迫力は圧倒的だった。視界が白い世界に輝いて染まった。

暑さを忘れて夢中でシャッターを押した。



(上) 本流の木曾川沿いに南木曾町(長野県)に入る。お目当ては、木曾路の溪谷で一、二を争う美しさといわれる柿其溪谷だ。支流の柿其川が花崗岩の山地を侵食してできた溪谷で、澄んだ水に心を洗われる。その柿其川が白い帯となって落下する牛ヶ滝は落差約25m。滝壺の大きさとアンバランスが何となくユーモラスに映る。

(下) 南木曾町からさらに上流の大桑村で支流の阿寺川に入る。一帯は木曾桧やサワラなど“木曾五木”が生い茂る阿寺風致探勝林で、溪流と樹木のハーモニーがすばらしい。緑が目染み入るようだ。また、エメラルドグリーンに輝く流れの美しさは例えようがない。蝉時雨の中で巨大な花崗岩の上に佇み、しばしせせらぎに耳を傾けた。